漢文大系

3

（日）服部宇之吉 編

四川大學出版社

域外漢籍叢刊

漢文大系

（第三册）

四川大學出版社

責任編輯：莊　劍
責任校對：袁　捷
封面設計：墨創文化
責任印製：王　煒

圖書在版編目(CIP)數據

漢文大系：22册 /（日）服部宇之吉編. —成都：四川大學出版社，2017.11
ISBN 978-7-5690-1275-0

Ⅰ.①漢…　Ⅱ.①服…　Ⅲ.①經學-選集Ⅳ.①Z126.1

中國版本圖書館 CIP 數據核字（2017）第 269323 號

書名　**漢文大系**

編　　者	（日）服部宇之吉
出　　版	四川大學出版社
地　　址	成都市一環路南一段 24 號（610065）
發　　行	四川大學出版社
書　　號	ISBN 978-7-5690-1275-0
印　　刷	虎彩印藝股份有限公司
成品尺寸	185 mm×260 mm
印　　張	1222.5
字　　數	17000 千字
版　　次	2017 年 11 月第 1 版
印　　次	2017 年 11 月第 1 次印刷
定　　價	16800.00 圓（全二十二册）

◆讀者郵購本書，請與本社發行科聯繫。
電話：(028)85408408/(028)85401670/
(028)85408023　郵政編碼：610065
◆本社圖書如有印裝質量問題，請寄回出版社調換。
◆網址：http://www.scupress.net

版權所有◆侵權必究

第三册

唐宋八家文讀本（一卷至十四卷）清 沈德潛 編選 三島毅 評……一

例言

一　本書本文中の評釋及び段落は、總べて文學博士三島中洲先生の說にして、從來二松學舍生獨得のものなりしを、今回博士に請ひて、博く之を江湖に發表することと爲せり。而して博士の令息文學士三島復氏特にこれが校閲の勞を執られしものなり。ここに記して謝意を表す。

一　欄外假名交りの注釋は予の擔當する所なりしが、多忙の故を以て果さず、專ら文學士若木廣良氏の筆に成りしものにして、中洲先生の與り知らるる所に非ざるなり。

一　年譜は富山房編輯局の編纂に係り、解題は予の起草せしものなり。

明治四十三年八月　　兒島獻吉郎識

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

解題

唐宋の文人作家は實にその人に匱しからず。而して唐宋の間に八大家を選定せしは朱伯賢の八先生文集に始まりて、唐荆川の八大家文格に顯はれ、茅鹿門の八大家文鈔及び儲同人の八大家類選に定りぬ。則ち八家の選定は明代に昉まり、沈德潛の唐宋八大家文讀本は茅儲二家の選本に基因せるものにして、茅儲二家の選本は沈氏の選本の前身と謂ふべきなり。

然れども八家の選定に就きては、古來學者間に異論なきに非ず。呂東萊の古文關鍵に唐宋の作者八家の文を載せたりと雖も、彼の八家は韓柳歐曾及び三蘇の七家以外に、張耒を取りて王安石を取らざりき、賴山陽の如きは曾鞏を八家中に入るべからずとて、余不喜曾文、況讀三蘇而次至於此、如與快友談罷、更逢紗帽惡客、安得不悶悶と曰ひぬ。顧ふに王安石を排するは、安石の性行に慊焉たらざるものあるによりてのみ、文章家としての彼は優に八家に伍するに足れば、決して其人を以て其言を廢すべからざるなり。曾鞏の文は固より三蘇の文と趣致を殊にせりと雖も、しかも亦三蘇の特色以外に彼の特色なきに非ず。試に八家に就きて、その特色を發揮せん。

一　韓退之と柳子厚

漢魏以後隋末に至る八百餘年の文章は、蘇軾の所謂八代の衰なり。故に唐興りてより高祖以後一百六十餘年間の文章は、尙ほ江左の餘風を承けて雕章繪句の弊に陷りしも、貞元元和の際に韓愈柳宗元出でて、先秦の古文を唱道するに及び、皇甫湜季翺等これに應和し、遂に能く八代の衰を挽回し、上は孟莊荀韓の徒に接踵し、下は歐蘇王曾の輩をして風を聞きて興らしむ。蓋し唐宋以降文章復興の氣運は、韓柳の二家實にその端を啓きしものなり。

韓柳以前の唐の文章は、初唐に王勃揚烱あり、能く一代を代表して四六駢儷の美を發揮せり、これ文章上の第一期なり。降りて盛唐の初めに蘇珽張說の文章ありて、時に燕許の大手筆と稱せらる。これ時文の稍變調に屬するものにして、文章上の第二期なり。後ち韓柳二家中唐に出でて、狂瀾を既倒に回するに及びて、文章上の第三期を爲せり。然れども陳子昂の奏疏、元結の奏議が時習に染まずして、能く古文の面目を得たるが如きは、韓柳二家の先驅を爲せるものに庶幾からんか。

韓愈字は退之、文公と謚せらる。人と爲り明敏果鋭にして、言を發するに畏避する所なく、操守堅正にして妄りに詭隨せず、慨然として名教を興起し、節義を弘奬するを以

て己の任と爲し、人と交るに榮枯窮達によりて節を易へず、常に後進を利導して誘掖推援最も懇切を極め、小子後生にして彼の指授を受くるもの、及び一時の名士にして彼と與に詩酒の閒に徵逐するもの、皆自ら韓門弟子と稱しぬ。

彼は幼より學を好み、膏油を焚きて晷に繼ぎ、矻矻として日に數百千言を記す、稍長ずるに及びて六經百家の學に通じぬ。しかも彼の成功は、學者たるよりも寧ろ詩人たるに在りて、彼の價値は詩人たるよりも寧ろ文章家たるに在りき。彼の初め文章を學ぶや、戛戛乎として渾身の心血を傾注し、處るときは忘るる如く、行くときは遺る如く、儼乎として思ふ如く、茫乎として迷ふ如く、文章を以て自家の生命と爲し、讀む所のものは三代兩漢の書にして、期する所は聖人の志、仁義の道に在りき。

彼恆に當時の文が排偶の弊に拘束せられて、經誥の指歸、馬班の氣格、復た振起せざるを憂へ、一意專心深く本始を探りて、上は姚姒の渾渾として涯なく、周誥殷盤の佶屈聱牙、春秋の謹嚴、左氏の浮誇、易の奇にして法、詩の正にして葩なるより、下は莊騷太史の錄する所、子雲相如の同工異曲に逮ぶまで、皆取りて己が藥籠中の物となし、しかもこれを筆に託し紙に發するに及びて、務めて陳言を去り、肯て前人の一言一句を踏襲せざりき特に行文の閒に長短錯綜の句法を用ひしが如きは、四六駢儷の宿弊を打破

せんと欲する彼の意氣精神の發現に非ずや。これ彼が唐三百年の第一人として、文學上に無上の光榮と莫大の價値とを有する所以なり。

柳宗元字は子厚、少にして聰慧、能く、經史に通達し、最も漢詩楚騷に精しく、童子たりしとき已に成人の風ありき。後ち博學宏辭の科に登り、集賢殿正字となり、儁傑廉悍、議論古今を證據し、經史百子に出入し、踔厲風發、常に一座を屈し、名聲大に振ひ、一時の名士皆慕うて交を彼に求め、諸公要人爭うて我門下に出でしめんと欲しぬ。其文章を作るや、思を構へ筆を援れば、璨として金玉の如し。晩に罪を得て自ら山水の間に放浪するに當りて、心中の不平鬱勃一にこれを文に發して、氾濫渟蓄、古に近くして壯麗なり。

彼の少時の作は、尙ほ六朝の餘習を帶ぶるものありと雖も、貶謫以後の作は、篇篇精緻奇峭にして、鏗鏘の音あらざるはなし。彼嘗て自ら文章を作るときの工夫を述べて、輕心を以てこれを掉かさず、怠心を以てこれを易へず、昏氣を以て出ださず、矜氣を以て作らず、書に本きて質を求め、詩に本きて直を求め、禮に本きて宜を求め、春秋に本きて斷を求め、易に本きて動を求め、穀梁氏に參してその氣を厲にし、孟荀に參してその文を暢ばし、莊老に參してその端を肆にし、國語に參して趣を博くし、離騷に參して幽を致し、太史公に參して潔を著はすと曰へり。これ彼の抱負にして、また韓愈が八代の

衰を挽回せんとするの意氣と、その揆を一にせる所あるを知るべし。

試に韓柳二家を比較せんに、二家同時に生れて、交誼最も親密なりしに係はらず、その人物性格、その主義本領に於て兩者全く相殊なり。韓が畢生極力佛を排斥せるに反して、柳は浮圖の言を嗜みて易論語に合へりと爲し、韓が周孔孟軻の道統を得たるものと自信して流俗を顧みず、抗顏人の師となり、後學を收召せるに反して、柳は聖人の道を扶翼せんと欲しながら、强ひて人の師たるを避く。韓が連りに貶謫を被るとも、百錬の剛鐵、毫も挫折せずして、晩年の氣焰益高かりしに反して、柳は一たび坐して永州に貶せらるるや、深く自ら氣鋒を藏して、文學辭章以外に復た觀るべきものなかりき。而して二家の文章を比較すれば、韓は高山の雄峙せるが如く、大川の奔淘せるが如く、柳は巉巖の奇峭なるが如く、絶湍の磯激せるが如く、韓は平原曠野に正を以て合する師の如く、柳は間道斜谷に奇を用て交はる兵の如く、韓は天成の美玉の如く、柳は人工の彫金の如く、前者は經に原づきて理を論じ、後者は史に原づきて事を敍べ、前者は局面の宏肆と氣魄の雄大とを以て勝り、後者は敍述の精微と筆致の雋潔とを以て勝りぬ。故に韓の詩は時に有韻の文たることあるに反して、柳の文は時に無韻の詩たることあり。これ韓柳二家の特色各殊なる所に非ずや。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二　歐陽永叔

宋が古文の普及時代にして、散文の全盛期なるは、猶ほ唐が律語の普及時代にして、韻文の全盛期なるが如し。唐の韻文界に於ては、李杜以外の詩人にして、李杜の壘を摩すべきもの尠からず。唐詩紀事に唐の詩人一千一百五十家を採輯せりと雖も、一代の名家は猶ほ未だ盡く網羅せられたるに非ず。全唐詩に唐の名家二千二百餘家を採錄せりと雖も、三百年間の詩人は猶ほ遺佚なきに非ず。而して唐の散文界に韓柳の二大家を出だせりと雖も、韓柳以外の古文家にして、二家に接踵すべきもの殆んど一人もなかりき。

然るに宋の散文界に於ては、歐蘇王曾の六大家を出だせるのみならず、六大家以外の古文派にして、能く六大家の壘を摩すべきもの少からず。司馬光、呂祖謙、陳亮、朱熹の如き皆然らざるはなし。故に唐宋詩醇に於て、宋は僅に其二を占めて、唐は其四を占むるが如きは、唐の韻文全盛を證すべしと雖も、唐宋文の八大家を選定するに方りて、唐は僅に其二を占めて、宋は卻つて其六を占むるが如き、亦宋の散文全盛を證すべきに非ずや。

宋初の散文界が、五代の後を承けて駢偶纖儷の弊習に陷りしは、猶ほ唐初の文章が

六朝の餘習を帶びたるが如し。而して宋に歐陽修出でて古文を鼓吹せしは、猶ほ唐に韓愈出でて古文を唱道せしが如し。歐陽修嘗て韓退之の遺稿を獲て、一讀再誦、心竊に仰慕して、志を苦しめ頤を探り、一時寢食を忘るるに至りぬ。則ち彼が退之に私淑せることの大なるを知るべし。蘇東坡嘗て彼を稱して今の韓愈なりと曰ひ、韓魏公も亦嘗て彼の爲に墓誌銘を撰して、自漢司馬遷沒、幾千年而唐韓愈出、愈之後又數百年、而公始繼之、氣焰相薄、莫適高下と曰ひぬ。蓋し彼の文が嘗に退之を祖述せし所あるのみならず、文學上に於ける彼の功が、退之に頡頏すべきものあるを看破したるものに非ずや。況んや三蘇は皆彼の推援によりて其志を得、曾鞏王安石も亦彼の奬引によりて其名を成したるが如きは、實に司馬遷韓愈以上の功績と謂はざるを得ざるなり。

歐陽修字は永叔、醉翁と號し、また自ら六一居士と稱し、文忠と謚せらる。その人と爲り剛勁にして、義を見て爲さざるなく、機穽前に在りと雖も、一たび志を立つれば少しも顧慮する所なし。蓋し彼は氣の人にして、情の人に非ざるなり。故に屢貶謫せらるると雖も、志氣少しも撓むことなかりき。而して彼の文章は、最も平淡にして最も溫潤なり。故に彼の文を讀みて彼の人と爲りを想像すれば、彼は情の人にして、溫厚の君子、寬仁の長者たりと謂はしむ。彼の性行を知りて彼の文章を想像すれば、彼の文章は英偉剛

勁にして一氣呵成、翰を揮へば輒ち飛ぶが如きものなるべしと謂はしむ。彼の性かくの如く剛勁にして、彼の文かくの如く溫潤なりし所以は何ぞや、蓋し鍛錬推敲の功自ら然らしむるのみ。則ち彼の平淡は東坡の所謂絢爛の極なるものならんか。

凡そ人の文章には、少年の作と、中年の作と、晩年の作との三大變化あるものなり。少年の作に英氣あり、霸氣あり、晩年の作に老成の趣あり、圓熟の致あるは必然の數なり。然るに歐陽修の文は、篇篇老成にして、字字圓熟ならざるはなし。これ彼が常に自ら推敲して改竄を加へ、晩年に至りて猶ほ百世の笑を怕れて、自ら舊稿を改むるに苦心せしに由れるのみ。彼は嘗て作文の法を述べて、看多、做多、商量多の三多を稱し。また作文在熟、變化姿態皆自熟處生と曰ひぬ。故に彼自ら文を作るや、その稿を壁に貼して改竄を事とし、終篇一字を留めざることありき。晩年手づから舊稿を改むるに甚だ苦しみしとき、夫人旁より問ひて曰く、先生の嗔を畏るるかと。彼は對へて、先生の嗔を畏るるに非ずして、卻つて後世の笑を怕るるのみと曰ひぬ。これ彼畢生の主義なり、理想なり。

三　三蘇

蘇洵字は明允、老泉と號す、蜀の眉山の人なり。年二十七にして始めて憤を發して學を爲し、進士及び茂才の試に應せしも及第せざりしかば、意氣嶸崢の彼は、慨然として

平常爲りし文を悉く焚き、戸を閉ぢ書を讀み、遂に六經百家の說に通じ、嘉祐年間に二子軾轍と俱に京に至りて、翰林學士歐陽修に詣り、權書衡論等二十餘篇を上りぬ。歐陽修これを得て、賈誼劉向不能過也と曰ひしかば、一時士大夫爭うて之を傳誦し、文人學者競ひて之に模倣し、遂に三蘇の名聲は天下を風靡するに至れり。

老泉は氣の人なり、東坡は才の人なり。故に老泉の文に揣摩縱橫の氣習ありと雖も、その筆勢矯矯として波瀾橫成せるは、八家中希に覩る所なり。呂東萊嘗て彼の文を稱して、戰國策史記より出づるものと爲し、彼の好處を學ぶべく、彼の不純處を戒むべしと曰へり。亦故なきに非ざるなり。

蘇軾字は子瞻、嘗て黃州に謫せられてより、自ら東坡居士と號せり。幼より穎悟にして識見あり、冠するに及びて博く經史に通じ、嘉祐二年に弟轍と同じく禮部の試に應ず。時に考官歐陽修は子瞻の刑賞忠厚之至論を得て、これを多士に冠せんと欲せしも、その客曾鞏の作ならんと疑ひ、之を第二に置けり。轍も亦選中に在りしかば、仁宗二蘇の對策を讀み、大に喜びて朕今日爲子孫得兩宰相と曰ひぬ。

彼の文章は老泉を師承せるものなりと雖も、彼の天才は乃父に過ぐるを以て、橫說豎說、意の到る所、縱橫奔馳復た滯礙なく、その體渾涵、その趣淵深、而してその氣焰光芒

永く百代に雄視せり。もし彼の天才を古人に比すれば、莊周の神才と李白の仙才との間に在るものならんか。彼嘗て自ら文を作る法を述べて、文章は行雲流水の如しと曰ひ、また吾文は萬斛の泉源の如く、地を擇ばずして出で、行くべき所に行き、止まらざるを得ざる所に止まると曰ひぬ。これ彼が古今の文章家中、天才派の泰斗たる所以なり。

天才詩人たりし彼は、固より經義道德を以て束縛せらるることなかりき。故に已に禁林に登れども敢て言語を愼まず、常に綺語を以て時政を謗訕し、時に高才を負みて諸公卿を狎侮せしかば、彼は屢人の慍を蒙りて、往往奇禍を招くことあり。これ蘇轍が彼を戒むるに口舌の禍を以てせし所以にして、嚴峻を以て自ら持する程頤と、天才派の彼とが相容れざりし所以も、亦ここに在るのみ。然れども彼は天下の士を汎愛して、賢と不肖とを問はず、親と疎とを論せず、常に歡如として肝膽を輸瀉せざるはなし。彼嘗て汎愛の交を述べて、上可以陪王皇天帝、下可以陪悲田院乞兒と曰へり。これ蘇轍が居常晦默を主として、許可少きと撰を異にせり。故に蘇轍又彼を戒むるに友を擇ぶべきを以てせり。而して彼は對へて、眼前天下に一個の不好人なしと曰ひぬ。蓋し彼の曠懷にして雅量なるや、賢不肖親疎一たび彼の眼に入りて、皆心に逆ふなし、安んぞ好不好を辨ぜんや。街談市語一たび彼の鎔化を經れば、皆詩に入るべし、安んぞ雅俗を知ら

んや。儒道佛仙一たび、彼の剪裁を待ちて、皆己の藥籠中の物と化す、安んぞ獨り孔顏の樂のみを樂まんや。彼の超然臺は莊周達觀の旨にして、大悲閣は佛境界の文字、芙蓉城黃鶴樓は仙境界の文字に非ずや。天才の詩人、口を開けば文を爲し、筆を援れば章を成し、之を左右に取りて其の源に逢ふ。豈區區として是非の判斷に迷ひ、善惡の區別に苦心することあらんや。これ强忮執拗の王安石をして、子瞻は人中の龍なりと贊歎せしめし所以ならずや。

蘇轍字は子由、潁濱と號す、明允の次子にして子瞻の弟なり。然れども彼の性行を察するに、乃父の豪氣なく、乃兄の天才なく、素樸にして沈靜、寡言寡欲にして交友を擇ぶものの如し。故にその文に發するもの、法度整齊にして恬澹渟蓄その人と爲りに類せり。しかも亦時に大言壯語、痛論切議、殆んど父兄に愧ぢざるものなきに非ずと雖も、彼の長所は此に在らずして寧ろ彼に在るなり。

四　王安石と曾鞏

王安石字は介甫、半山と號す。幼より聰慧にして、讀書一遍輒ち終身忘れず、長ずるに及び、博學多聞にして世の宗師と爲り、當時學者その門下に出づるを榮とし、一たび彼に稱譽せらるれば、無上の光榮と爲して、名聲天下に喧傳せらるるに至れり。然れども

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com